

学と意識

——ヘーゲルにおける意識の位置——

Wissenschaft und Bewußtsein

—zu Kozus Interpretation—

星 敏 雄

Toshio Hoshi

幸津國生博士は最近（1999年10月）『意識と学：ニュルンベルク時代ヘーゲルの体系構造』という468頁の大著を以文社より出版された。幸津博士はペゲラーのもとに留学し、ヘーゲル・アルヒーフでヘーゲルの未刊の原稿や講義草稿を研究し、特にニュルンベルク時代のヘーゲル研究に特化した研究は異彩を放っており、注目すべきヘーゲル研究者であることは衆目の一致するところである。ニュルンベルク時代はヘーゲルにとっては不遇なギムナジウム時代であり、その時代のギムナジウムの学生におこなった講義はヘーゲル研究にはほとんど問題とされなかった。しかし発展史的研究が日本で当然となった、1980年代以降ニュルンベルクのギムナジウム時代は重要な位置を持つ。とはいえ大学での講義ノートに対してどのようにデジェネレイトされたものとして受け取るべきかには困難な側面があるのも事実である。とまれこの『意識と学』では従来ニュルンベルクに留まっていた幸津博士が『精神現象学』や後期の学の体系であるエンチュクロペディーにまで論を延長して展開しているのは大変な躍進であると評価される。実際この『意識と学』はドイツ語で先行出版され、さらにその解釈の大半は先に論文「意識と学」（加藤尚武編『ヘーゲル哲学への新視角』創文社、1999年5月刊所収）で完全に展開されており、著作『意識と学』はいわばその論証となっている。

幸津博士がこれら一群の研究で明らかにしているのは題名も示すとおり、意識と学の関係である。幸津博士が提出する独自の解釈は学の体系全体に対して意識が持つ方法的意味という意識の「第三の捉え方」を示すことにある。

幸津博士の主張を引用する。「意識は学の中に組み入れられている限りにおいて確かに体系的に位置付けられるであろう。しかし、その機能に関しては、それは学への導入にせよ学の中に組み入れられた形にせよ学の一部として働くのではなくて、むしろ方法的に学の進行に対していわば垂直的に働くというように捉えられるというのではないだろうか。」（前出「意識と学」論文96頁）または、「精神現象学の二重のあり方、つまり領域としての大『精神現象学』および「精神現象学」というあり方において働く意識という捉え方に加えて、さらに方法的機能としての意識という捉え方、つまりそれに基づいて意識が方法的に学の全体に互って働くという捉え方が第三の捉え方として提示されなければならないだろう。」（前出論文96頁）

「学の中に組み入れられている意識」と幸津博士が言うものはもちろんヘーゲル研究者に隠語的なものだが、エンチュクロペディー体系の精神哲学の中の小精神現象学（後に説明）での叙述対

象としての意識であり、「学への導入としての意識」とは大精神現象学での意識であり、これらに対して後期体系の「垂直的な」(?) 方法機能を持つ意識を第三の捉え方として提示するのが幸津博士の根本的な主張であることがわかる。もちろんこれに対してはすぐに次々と疑問が列挙できる。垂直とはどのようなことか? 学の方法を解明してその理念に従って実在的領域を学的に叙述するのが後期ヘーゲルの体系であったとする解釈は正統派的解釈として成立可能であろう。大『論理学』終章で学の方法をヘーゲルは論じており、その方法概念と幸津博士の意識の方法機能は抵触し矛盾しないか? いわば学の水平=地平に対して垂直な方法的視点を導入するというのはカント的超越論的主観性、意識をヘーゲルが保持していたという解釈とも言えるが、その際ヘーゲルが意識的に「超越論的 *transzendental*」という言葉を避けている事情はどう考えるべきか? また大『精神現象学』はカント的な意識と物自体という二元論の克服の企てと理解すべきである(と私自身かつて主張したのであるが)とすれば、ヘーゲルが後期にそのような二元論的対立を抱えた超越論主義に帰るであろうか? さらに本質的な議論として幸津博士は大『精神現象学』における意識と小『精神現象学』における意識を領域として認定しているが、ここには「意識の立場」と「意識」の混同があるのではないか? この区別に気付いていないのではないか? ヘーゲル哲学をかつてヘーリングは精神一元論 *Geistmonism* と意味付けた。たしかにヘーゲルにおいては精神が重要で、意識は精神の下位区分でしかないと言えらるであろうが、それにも関わらず意識を後期体系の構成原理、方法として持ち上げる幸津博士の解釈は独特のものであることははっきりしている。

さて、幸津博士の研究の課題は次のものとなる。「後期ヘーゲルの学の体系構想において意識と学とがどのように関わるのかという問いをめぐって、とりわけ意識がどのように位置付けられるかということに重点を置いて発展史的な視点から捉え、この問いに一つの答えを与えることである。」(前出論文77頁) なぜ意識が問題となるのかというと、ニュルンベルク時代のヘーゲルの論考は意識の問題群ばかり論じていて精神が論じられていないなどと言うことではなくて、①精神現象学と論理学との関係の問題が体系構想の枠組みを提示しており、意識の位置付けの問題はこの精神現象学と論理学との関係の問題に関わっており、②意識のこの位置付けの変化が論理学構想の変化に関わっており、③さらに、そのように意識が体系の構成に関わっており意識的方法的意味が指摘できる。(ibid.) 幸津博士の論考はこのように展開してゆく。そこでわれわれは先ず、精神現象学と論理学の関係についての幸津博士の解釈から吟味をはじめ。

まず私見を述べておく。ヘーゲルは若いときに出版した『精神現象学』(1807年)で意識から学(厳密には学とはヘーゲルの論理学を指すがゆるくはヘーゲルの学の体系つまりエンチクロペディーの体系を指すとしてもよからう)への上昇を論じた。ここでヘーゲルは意識から脱却し、『(大)論理学』(1812年, 1831年)では意識を克服した哲学的知に立脚すると通常理解される。しかし論理学に続く『エンチクロペディー』(1830年)の第三部門の「精神哲学」で再び意識を論じ、しかも精神哲学の一部門として「精神現象学」と名付けられた箇所が存在する。日本ではこれを小精神現象学として前者を大精神現象学と呼ぶ。(加藤尚武教授にはじまるのではないかと推測する。) そうすると、大精神現象学がヘーゲルによって破棄され、エンチクロペディー体系の一分枝としての小精神現象学に縮小化され、位置付けが変わったと通常理解されてきた。「学に先立って意識を学の立場に導く」役割を果たす大精神現象学は学に先立つという性格付けからして学の体系とは別物で、とうぜん意識は学の外にある。しかし学の体系の一分枝としての小精神現象学においては意識は学の内部の一部分としていわば中にあり、外にない。意識と学の関係は

変わってしまった。通常の表層的理解はだいたいこのようなものであろう。

この『精神現象学』については従来様々な解釈が跋扈してきた。この大『精神現象学』という書はいかなる著書であるのかが問題とされてきた。その多様さは、例えば、次のフルダの分類をみれば明らかである。（cf. Fulda, Das Problem einer Einleitung in Hegels Wissenschaft der Logik, S. 77-78）

フルダの分類を元にかつて私が1992年刊弘文堂版『ヘーゲル事典』の「精神（の）現象学」の項目（星敏雄執筆）で再構成したものを示せばこうなる。

精神現象学はⅠ「体系の部分である」とする大多数の解釈者がいて、その中に

①「体系第一部」とする解釈者（ローゼンクランツ、英訳者ベイリー等）

がいて、さらに

「主観的精神の一部」,

「哲学史の最終部」,

「理念における反省の推理」等の解釈者がおり、

②「数で数えられない体系の分枝」とする解釈者もいる。

そして、Ⅱ「体系部分」ではなく「学への導入 Einleitung」とするほとんど存在しない位少数の解釈者がいて、それも

「体系への予備学」,

「体系への生成的前段階」,

「体系への特定贈与分 Voraus」,

「学（＝論理学）への予備学」（星敏雄）に分けられる。

さらに、Ⅲ「体系序論にして体系総論」（金子武蔵）と双方を含ませるものがある。

さらに、ヘーゲルは『精神現象学』を執筆後撤回した、捨てたという解釈が確証された解釈として成立している訳である。この撤回の時期は論者によって異なっている。（執筆者つまり私の解釈はⅡ「体系部分」ではなく「学への導入 Einleitung」であり、特に論理学という「学への予備学」という解釈視点を採り、もちろんヘーゲルは、途中迷いはしたが、学への導入としての大『精神現象学』を一度も撤回否定しなかったという解釈態度を採る。）

さて、この間の事情をヘーゲルの標準的解釈を示す、京都大学出身の故中埜肇教授は『ヘーゲル哲学の基本構造』（1979年以文社刊）で簡潔に説明している。「全体が導入部門と体系部門に分かたれる。導入部門は精神現象学である。もっともそれが哲学体系への導入部であるのか、それとも体系そのものの一部分であるのか、またいかなる意味においてそうであるのか、などという点については、——ヘーゲル自身が生涯一貫して変わらない見解を持っていたわけではない。例えば1807年に出版された『精神現象学』は初め「学問体系の第一部」という表題を持っていたが、晩年になってそれが撤回されたし、またニュルンベルクの『プロペドイティーク』以降に成立したいわゆる「エンチクロペディー体系」では、「精神現象学」は「精神哲学」のなかの「主観精神」に含まれるのである。」（中埜、同書1-2頁）

またわが国でもヘーゲル研究の現在の権威とされる加藤尚武京都大学教授はかつて、『精神現象学』は「永遠に未完の書である」（加藤尚武『ヘーゲル精神現象学入門』有斐閣、1983年）と宣言され、「学の体系第一部」として企てられたこの1807年の『精神現象学』が晩年の「論理学—自然哲学—精神哲学」という構成の『エンチクロペディー』体系と非連続である、ストレートではなかったとする見解を表明し、大『精神現象学』は晩年の思想とは一致していないということ

で、(晩年の) 体系枠から大『精神現象学』を理解することを禁じている。(加藤尚武, 前掲書) もちろんある意味で『精神現象学』を深く愛する加藤教授はそれをあらゆる汚染から身を挺して守る父親のようでもあり心情的には理解可能なものである。

しかし、大『精神現象学』と晩年の体系の非連続性は正当性をもって主張できるのであろうか? また中塾教授のように大『精神現象学』の小「精神現象学」への縮小を正当性をもって主張でき尽くすのであろうか?

学の体系第一部と第二部について先ず言えることは私見では次の通りである。1807年の大『精神現象学』の刊行時に出版社との契約で体系を執筆すると言った手前であらうか、この精神現象学は表紙では『Ge. Wilh. Fr. ヘーゲル著学の体系第一部精神現象学』とあり、精神現象学は学の体系第一部という性格付けを刊行時は持っていた。さらにこの精神現象学に対するヘーゲル自身の「自己宣伝文」(Intelligenzblatt der Jenaer Allgemeinen Literatur-Zeitung 28. October 1807の Hegels Selbstanzeige in: Hegel Gesammelte Werke Bd. 9, Felix Meiner, 1980, S. 446-447) では「学の体系第一冊精神現象学」に対して「第二冊は論理学の体系と哲学の残りの二つの部門である自然の学と精神の学が含まれる」(ibid. S. 447) とされる。実際『精神現象学』に続けて執筆された大『論理学』初版はこの関係(学の体系第一部として精神現象学と第二部である論理学, さらに自然哲学, 精神哲学という順序)を維持しているから、この後も体系第一部としての精神現象学という地位は保全されている。やがてこの論理学－自然哲学－精神哲学は『エンチクロペディー』の三部門となり、精神現象学はすでに述べたようにこの精神哲学の一分枝となる。ひどく外側的なこの種の議論が現在のヘーゲル文献学の実は主戦場でありつづけている。例えば大『精神現象学』の想定している「学の体系第二部」はエンチクロペディーの体系ではないという解釈などである。そうであれば「論理学－自然哲学－精神哲学」という体系は第一部精神現象学と第二部という関係で地続きでないということになり、後にヘーゲルが発言しその解釈で解釈者を悩ます、あの発言つまり精神現象学の学の第一部としての性格付けの撤回などありえないことになる。少々迂回してこの話題に停滞すれば事実是这样になっていた。大『精神現象学』執筆時からしばらくの間は体系第一部＝大精神現象学、体系第二部＝「論理学－自然哲学－精神哲学」という区分けはヘーゲルの中で成立していた。では、「学への導入」としての大『精神現象学』は多くの解釈者が認めているように撤回、破棄されたのであろうか? 私見ではもちろんそうではない。

1812年の大『論理学』初版序論でヘーゲルは、『精神現象学』と『論理学』の「外的関係」(G.W.F. Hegel Wissenschaft der Logik, Erster Band, Faksimiledruck nach der Erstausgabe von 1812, 1966, S. X) に言及し、前者は「学の体系の第一部 (erster Teil des System der Wissenschaft)」, 後者と「二つの実在的学, 自然哲学と精神哲学」は「第二部」であるとしている。1812年のこの序論に、ヘーゲルは、『論理学』二版を出す際、つまり1831年に注をつけている。「この(学の体系の第一部という) 題名は、(『精神現象学』の) 二版では——もはや添えられない。——(「論理学－自然哲学－精神哲学」と初版で) 語られた、第二部の企ての代りに、その後(つまり1812年の後) 私(＝ヘーゲル) は『哲学的諸学のエンチクロペディー要綱』を出版した。」(WL I S. 18) この1831年のヘーゲル自身による発言が、ヘーゲルが『精神現象学』を自分の「学の体系」からはずした。つまり否定したのだという解釈の根拠となる。もっとも精神現象学が体系第一部で第二部が「論理学－自然哲学－精神哲学」という枠組み全体を否定する解釈の立場をとるなら、上でのヘーゲルの発言は全く無意味で了解不可能なものとなってしまうであらう。さてこの枠組みが成立しているとして、精神現象学を学の体系から排除したという解釈が成り立つのであろう

か？不思議なことにこの解釈を採用しないヘーゲル解釈者は（私を除いて）皆無である。①注意すべきことは、かつての「学の体系、第二部」という名も、『エンチュクロペディー』につけられていないことである。さらに、「学の体系、第一部」という名前が、『精神現象学』に添えられ（beigebn）ないと言っているだけである。「学の体系、第二部」が『エンチュクロペディー』という名前になったのだから、第一部、第二部と数えられなくなっただけのことだ。②さらに、ヘーゲルは、この第一部、第二部という分け方を、「外的関係」と呼んでいることも重要なことであろう。第一部と第二部という分け方は内的に緊密な関係ではなく外的な、つまり便宜的な分け方であり、それを大『精神現象学』と『エンチュクロペディー』とに分けても外的な名前が変わっただけであり、内的な双方の関係性は変わらないと言いたいものである。しかし少なくとも、学の体系第一部という外的な名前が大『精神現象学』に添えられなくなったというだけのことで、これはエンチュクロペディーが「学の体系第二部」という名前を添えないのと平行である。この箇所を根拠にして1831年に、ヘーゲルが大『精神現象学』を棄てたとは言えない。ヘーゲルは、この注で、『精神現象学』第二版の出版に言及している。③つまり、ヘーゲルの1807年の大『精神現象学』の改訂、第二版の出版を1831年当時考えていた。実際には『精神現象学』第二版は未刊となったが、「序論（Vorrede）」の途中までは、ヘーゲルは行文を改訂した。（前出アカデミー全集版GW Bd. 9 S. 453f.）例えば27段の冒頭は、初版（1807年）では「学一般の生成、知の生成こそが、学の体系の第一部としての、精神現象学が叙述するものである」（GW Bd. 9 S.24; ズールカン版全集SW3 PhG S. 31）だが、第二版の改訂でこの「学の体系の第一部としての」が削除されている。この改訂は、原本XXXVII頁、(ibid.. S. 35) までで、35段には、現行版（第二版に基づく）では、「学の第一部」という表現が現存してしまっている。そこにゆく前にヘーゲルは死んでしまった。『論理学』の初版序論の注のプランはヘーゲルの死によって中断されてしまった。ヘーゲルは1831年に死んでいる。学の体系第一部という名前の撤回も、それに呼応した精神現象学序論の改訂もこの31年の出来事である。とはいえ、中断されても、ヘーゲル自身それを遂行しようとしていたことは事実であろう。ところで、この27段の削除（「学の体系の第一部としての」の削除）により残る行文は、「学一般の生成、知の生成こそが、精神現象学が叙述するものである」となる。絶対「知の生成」、「学一般の生成」という役割を持った大『精神現象学』は31年の死の年にも否定されてはいないのである。この証明で充分ではなかろうか。大論理学第二版序論での大『精神現象学』の「学の体系第一部」という名前の放棄は「学一般の生成」、つまり学への導入としての大『精神現象学』の役割を実質的に放棄するものでは断じてなく、外的な名前を破棄しただけである。内的な、実質的な精神現象学の位置付けをヘーゲルは死の床に置いてまったく放棄してはいなかったのである。

幸津博士のこの関係についての解釈はどのようなものであろうか。①幸津博士がおそらく所属するであろうペゲラー派の人たちに一般的にみられるように、大『精神現象学』執筆当時の一枚の執筆メモから、大『精神現象学』の「意識－自己意識－理性－精神－宗教・絶対知」という系列は、イエナ当時の学の仕分けであろうと（1枚のメモだけから抽出）される系列、すなわち「絶対的存在・相関－生命と意識－知る知－精神－自己についての精神の知」（GW Bd. 8 S. 286）という系列に対応しているとされ、ここに大精神現象学と論理学の対応が語られる。（幸図前出書7頁）たしかに大『精神現象学』においても論理学との対応が一応ヘーゲル自身によって言及されていることは事実である。しかしこの場合の対応が何をその意味内容として持つのかを、ヘーゲルは示してはいない。一対一対応なのか、集合間の濃度における対応なのか、漠然とした対応な

のか、曖昧だ。弁証法的考察方法を採用するヘーゲルがまさか、リニアな、つまり一直線的な(一対一)対応を考えていたのであろうか疑問が残る。さらに、もしこの解釈をヘーゲル哲学の二つの、精神現象学と論理学の関係に当てはめるとすると、それはヘーゲルが当時忌み嫌い、それと戦っていた、あの単純な形式主義、図式主義に陥りはしないか。数頁と数行のヘーゲルの証拠しかないわけであるから、議論そのものがそれ以上進行しないであろう。(もちろん完全否定はしないのであり、pendingということである。ただ、もしこのペゲラー派のテーゼが正しいとすると、「学への導入として」の学は厳密には論理学を指示しているわけであるから、論理の「学への導入 *Einleitung* として」の大『精神現象学』は学それ自身である大『論理学』と同じスタンスで同じ進行で書かれていることになる。大学に入学するための予備校でのカリキュラムの進行と同様の進行で、大学においても同じ進行順序で大学のカリキュラムを学ぶのであろうか？もうしそうであったのなら、大『精神現象学』と後期において『エンチュクロペディー』の「精神哲学」の一分肢としての「精神現象学」の関係についてあれほど悩んだヘーゲルが大『精神現象学』と論理学との対応関係について悩まないはずがないであろう。この対応関係についての話題は洞窟探検のような、パズル解きをしているような知的興奮はあるだろうが、推測の域をでないのではないのか？

もちろん幸津博士は、イエナ当時には大『精神現象学』と大『論理学』の相互に前提しあう関係があったと解釈する。(前掲論文80頁) もちろん私見では、論理学への導入 *Einleitung* としての大『精神現象学』は、その導入された大『論理学』とは一方的関係で論理学から導入としての精神現象学にもどる道はない。ところが幸津博士の解釈では精神現象学は「学への導入」として論理学に先行するが、他方では意識の経験の道が学の抽象的契機に対応するのだから論理学を前提している(前掲論文80頁)と相互性が主張される。精神現象学と論理学がほぼ同一の対応する進行プランで、論理学は「絶対的存在・相関－生命と意識－知る知－精神－自己についての精神の知」という系列で進行し、精神現象学はそれに対応する「意識－自己意識－理性－精神－宗教・絶対知」という系列で進行するというテーゼからは、両者は意識レベルで記述されるか思考(＝絶対知)レベルで記述されるかだけの違いという、つまり同一物の違ったバージョンという主張が幸津博士のように導出されやすい。そこから、双方の相互前提という主張も出てき易いであろう。しかし事実は片方はそれである論理学への導入(*Einleitung* 序論、入門)としての精神現象学であり、導入された当のものである論理学は別物である。玄関から入り口(精神現象学)までとその家の内部(論理学)は違う。もちろん大『精神現象学』の中には「精神現象学も一つの学である」というヘーゲル自身の主張がある。しかしこれは精神現象学は非学問的な叙述形式を持つのではなく、後に論理学で明らかにするような「学の方法」に従って叙述されているのであり、それ自体学的性格を十全に持っているという主張であると解釈すべきである。また後述するような近世的二元論の克服、とりわけカント的二元論を克服するという課題がヘーゲル自身にとって大『精神現象学』執筆時の課題であったことも見逃せない。他方論理学で最大規模で問題であったのはプラトンの本質主義の批判であり、プラトンの本質主義、イデア主義に対して、その本質を乗り越えたヘーゲル独自の脱本質主義を提示すること、アリストテレス以来の(実体、ウーシア探求としての)形而上学概念の(述語概念の探求としての形而上学への)変容を行うことが、つまり本質主義ののりこえと形而上学概念の変容という二大課題が大『精神現象学』執筆後の課題であったので(筆者つまり私はかつて『理想』掲載の論文で論理学の発展史的研究にすでに言及している)、それらのヘーゲルのインテンションを無視して双方を相互前提的關係として同一物

の違ったバージョンとして読むなどと言うことは許せることではない。

さて、しかし幸津博士は、②第二に、大『論理学』初版で「学の始元の論理的内在性」が確立されたので、精神現象学という前提は不要となったと解釈される。（前掲書8頁等）大『論理学』初版では大『精神現象学』は「学の体系第一部」として「学の体系第二部」である論理学への前提であるが、大『精神現象学』当時とは前提のあり方を異にしていると幸津博士は言う。具体的には次の主張となる。精神現象学は「学の始元の論理的内在性が確立されてからはそれまでとはことになって、一方ではこの論理的内在性が度外視される限りで論理学に関わるが、他方では学の中に組み込まれる。」（前掲論文80頁）。問題点として直ちに指摘できることは、第一に、1812年の大『論理学』執筆時にヘーゲルは「学の体系第一部」としての大『精神現象学』を、端的に言おう、「学の体系第一部」という名前を否定したのであろうか？もちろん名前として撤回したのは死の年1831年であるが、1812年当時は否定しているはずはないという疑問である。第二には、学の始元としての論理的内在性は大『精神現象学』執筆時にはなかったのかという疑問である。第三には学の始元の内在性の度外視ということの成立根拠である。度外視にはテキスト的根拠はないはずだ。度外視という文言はヘーゲルのテキストには存在しない。誰が度外視するのか？そもそも事柄として度外視がヘーゲルのシステム概念で成立可能なのか？ということが疑問である。確実に外在的解釈である。しかもゲバルト的 gewaltsam な。さらに付け加えておくと、幸津博士は同じ頁で「大『論理学』序文（私の訳語では「序論」）執筆当時（つまり1831年）には学の体系第一部ではなくなり、独立した著作として位置付けられる」（前掲論文80頁）と結論付けられている。つまり論理学のはいるエンチクロペディー体系と大『精神現象学』は独立した、非連続的な関係（先に指摘した加藤尚武教授の論点）であると主張する。もちろん独立したという意味が不明だが、おそらく前提関係が消えるというものであろう。つまり幸津博士の解釈では精神現象学と論理学の関係は、①大『精神現象学』執筆の1807年当時は相互前提というものであるが、②大『論理学』初版執筆の1812年には精神現象学は「学の始元の論理的内在性が度外視される限りで前提され」るようになり、「学の体系第一部ではなくなり」、学の中に組み込まれる。③そして、1931年死のとしには双方は非連続的な「独立した著作」となる。煩雑だが一つ一つ丁寧に事実を確証して反論を試みたい。

一番目の論点についてはすでに上で論じた。つまり精神現象学からの一方的進行があるのみで相互的な前提関係は皆無である。三番目の論点についてだが、大『精神現象学』と『エンチクロペディー』は元来独立した著作であるが、最終段階の『エンチクロペディー』には小「精神現象学」が現存し、また大『精神現象学』の第二版の準備をヘーゲルは31年にしていたという事実を博士は説明できない。二番目の論点についてはどうであろうか？つまり第一に、1812年大『論理学』執筆時の「学の体系第一部」というタイトルに関して、また第二に、『精神現象学』の前提の不要について、第三に学の始元の論理的内在性による度外視についてと二番目の論点には三つの論点がさらにある。

先ず1912年の大『論理学』での前提としての大『精神現象学』の不要の論点と、「学の体系第一部」というタイトルについて1812年のヘーゲルの語る事実を確認する。

1812年の大『論理学』序論で、ヘーゲルは、すでに上で言及したとおり、大『精神現象学』と大『論理学』の「外的関係」に言及している。前者は「学の体系の第一部 (erster Teil des System der Wissenschaft)」, 後者と「二つの実在的学, 自然哲学と精神哲学は「第二部」である。」(I. 初版.S. X) つまり1812年当時ヘーゲルは体系第一部と第二部の名前を全く否定していないどころか、

多分正確には、ここが第二部が論理学－自然哲学－精神哲学であることを示すはじめての箇所でもあるのだ。もちろん1831年の大『論理学』第二版の注で第一部の名前の撤回を表明するが、それは時に混同されるが1831年のことで1812年初版では第一部第二部の区分けはしっかり存在する。1812年に第一部という前提を捨てるという幸津博士の論点は維持しがたい。

しかし、大『精神現象学』のザッハリッヒな前提性は1812年の大『論理学』ではどのように捉えられているのか？幸津博士の主張するように相互的か？1812年の大『論理学』の序論を次に検証してみる。

「序論 (Vorrede)」で、ヘーゲルは大『精神現象学』と大『論理学』の関係を論じ、次のように言う。カント哲学に始まる「大変革」は問題があり、ヘーゲルは苦言をいうことから序論の叙述を始めるが、この大変革によって、かつて「形而上学と呼ばれたものが徹底的に根こそぎにされ、学問の連なりから姿を消してしまった。」(1. 初版S. III)「存在論、合理的心理学、宇宙論」「自然神学」「魂の非物質性についての研究」「動力因や目的因についての研究」「神の存在証明」は過去の遺物か、教育の為のものになってしまった。「これは奇妙なことである。」(ibid.)「悟性は経験を飛びこえてはならないというカント哲学の教え」(ibid. S. IV)が歓迎され、「学問と常識が手を取りあって、形而上学の没落を起こす努力をしたので、神体はないが、それ以外は様々な飾りをつけた寺院のように、形而上学はないが教養のある国民を目にするという奇妙な光景が出現した。」(ibid.)ヘーゲルは、これに対して、かつての形而上学に代るものとして、“論理学”を企てると言う。この“論理学”の「本質的視点は、学的方法の新しい概念を問題にする」(ibid. S. IX)ところにある。(学的方法を哲学に与えるというのがヘーゲルが論理学で目指したものであったとすれば後に問題にするのだが、幸津博士の意識の、体系＝学に対する方法的機能は相当な問題概念であることがここからも予料されよう)この学的方法とは「内容の自己運動」である。数学的方法、直観、そして外的反省による根拠からの推論という方法に対して、哲学の方法として、内容の自己運動(ディアレクティーク)をヘーゲルは考えた(さすがに私は現在のにはこの方法は成立不可能であると判断しているが)。さて、『論理学』の取り扱う対象は「純粹本質」であり、『精神現象学』の対象は「意識」である。「私(＝ヘーゲル)は、(学問的な方法に従った)仕方で、意識を叙述せんとした。意識は外面性にまどわされた知(in der Außerlichkeit befangenes Wissen)としての精神である。」(ibid. S. X)「意識は、その(『精神現象学』の)道程において、自分の直接性と外的具体から自分を解放し(befreit)、かの純粹本質そのもの(＝概念)を即且対自的にあるがままに、対象とする純粹知となる。」(ibid.)この純粹本質の自己運動の叙述が『論理学』である。まとめれば、意識は『精神現象学』を経て純粹知となる。この純粹知とは、『精神現象学』の最終段階、絶対知のことである。意識とは「外面性にまどわされた知」である。この外面性からの「自己解放」が、意識を絶対知とするものである。これによって、「純粹本質」を「即且対自的に」考察する『論理学』(ヘーゲルの形而上学)が可能となる。大『論理学』序論での以上のヘーゲル自身の記述を見れば、1812年当時精神現象学によって果たされた役割はカント的大改革に対する異議申し立てと、意識の立場に立脚した、物自体という外面性にまどわされたカント的知を乗り越えて純粹本質というイデア的なものを即且対自的に(つまりアリストテレス的に言えばカタ・ハウトに、わかりやすく言えばカント的物自体と心的意識の二元的意味付けから脱却して)形而上学的に論じる高さに立つということであり、ヘーゲルという作者にとって大『精神現象学』の執筆自身がヘーゲル自身を鍛えて、それこそBILDEN(陶冶)して、大『論理学』を執筆する高さにまで高めてくれたことが述べられている。精神現象学の前提性は内実をもって肯定されてい

ると解釈できる。

では1812年大『論理学』の序文（Einleitung）ではどうであろうか？検証しよう。そこでは、論理学の正当化（Rechtfertigung）としての精神現象学が語られている。つまり論理学の正当化こそが精神現象学によって果たされたことで、これは精神現象学によって以外には果たし得ない。論理学内部ではこの正当化は必要ない。精神現象学がすでにやってくれているから。先取りのに言えばこのような精神現象学の論理学にとっての前提性が率直に述べられているのだ。さて、基本的には序論と変化はないが煩雑さをいとわず要約するところなる。①「精神現象学で私（＝ヘーゲル）は、意識を、意識と対象の最初の直接的対立から絶対知への意識の進行において、叙述した。」（ibid. S. X）②「この道程は、意識の客観に対する関係の全形式を通り抜け、その成果に学の内容をもつ。」（ibid.）③「かくして、この（学の）概念は、論理学自身の内部でこの概念が現われ出てくる（hervorgehen）ことはともかくとして、ここ（論理学）ではなんの正当化（Rechtfertigung）も要しない。というのは、この（学の）概念は、まさにそこ（精神現象学）で正当化をえたのであるからだ。」（ibid.）④「この学の概念は、意識によるこの学の概念のこのような産出以外の正当化はなしあたえない。意識の形態全ては、真理として、この学の概念に解消してしまう。」（ibid. S. XI）このようにヘーゲルは序文で言う。ここで「学」と呼ばれているものは、ヘーゲルの『論理学』と考えてよい。この箇所では「学の、つまりより詳細には、論理学の定義」（ibid. S. XI）と言っているからである。注目すべきことは、ヘーゲルはここで、『論理学』の概念の正当性は、『精神現象学』によって以外には不可能であると断言しているということだ。

さらに論点を補強するものとしてあげれば、後にヘーゲルは1831年大『論理学』第二版の改訂でもこの序文のこの箇所は削除されず、むしろ「意識の形態全て」に「意識の固有な形態全て」という具合に強調されている位であることである。このことから、1812年の大『論理学』初版執筆時（そして第二版改訂時も）論理学の学の概念の導出の必然性の正当化としての大『精神現象学』の前提性はまったく否定されていないどころか、それ以外ないとしてむしろ積極的に是認されている。

大『論理学』初版の「論理学の一般的区分について」は初版では本文に入っているが、二版では序文の中に入っている。この区分についてでヘーゲルは対カントの戦略を語っている。「論理学はそのエレメント（境地）として、絶対知を持つ」（ibid. S. 1）が、これはカント的立場を越えているという。「カントの主な考え方は、カテゴリーを自己意識、しかも主観的自我へ要求する（vindizieren）というものである。」（ibid. S. 5）後の第二版では、これに続いて、ヘーゲルは次の文を添入している。「この規定の故に、（カントの）見解は、意識と意識の対立の内に留まっている。」（WLII S. 59）初版へ戻ろう。ヘーゲルは「意識」と「思考（Denken）」の区別をして、『論理学』で問題なのは「思考」であると言う。（1. 初版 S. 53）「意識は、自我と自我の対象との対立をそれ自身の中に含む。“意識”という呼び方は、思考という表現よりはるかに主観性の感じを放射する。思考はここでは、意識の有限性にまどわされぬ、無限な思考として、思考それ自身と解されねばならない。」（ibid.）この思考でヘーゲルが名指すことは絶対知としてよいであろう。この思考＝絶対知は、意識と区別される。ここでみる限り、「意識と意識の対立」の根源には「自我と自我の対象との対立」があり、意識が批判されるのは、その「主観性」の故である。カント的意識の二元論的対立から脱却した思考＝絶対知というエレメントで論理学は展開するという構図がここにはある。このように初版の序論、序文、区分において、精神現象学への大論理学の前提的關係は明らかである。1812年にヘーゲルは精神現象学への第一部としての前提関係を捨てたとい

う幸津博士の見解はやはり維持しがたい。「(学)の体系第一部」というタイトルを捨てたのは、よく誤解されるが、例えば加藤尚武教授もかつて平凡社版『ヘーゲル』で捨てたのは1812年とされたが、1812年ではなく1831年である。)

では幸津博士が論ずる始元の問題はどうであろうか？大『論理学』初版の始元論でヘーゲルはどういうのであろうか？精神現象学の前提性は始元論では否定されているのか？検証してみる。

大『論理学』初版のいわゆる「始元論」では、論理学は、精神現象学を前提し、その絶対知とは、展開されれば論理学となるという叙述が存在してしまっている。「精神現象学、あるいは、現象する精神としての意識の学から、意識の究極的、絶対的真理は純粹知であることが前提される。論理学とは、純粹学、つまりその範囲と伸展における純粹知 (das reine Wissen in seinem Umfange und seiner Ausbreitung) である。」(ibid. S. 69)『論理学』は絶対知の展開と定式化されてかまわないであろう。そしてその絶対知は大『精神現象学』の最終章である、あの「絶対知」なのである。もちろん論理学の叙述の進行上では始元である存在は直接的概念で無媒介的であり、媒介性を直接性に同一化してしまっている。最初の「純粹存在」概念の非媒介性と論理学の精神現象学からの前提性は別物である。

このようにしてみれば、幸津博士の解釈はここ始元論でも維持するのが困難であると結論付けたい。

1812年の論理学において精神現象学と論理学の相互前提ということで多分幸津博士が考えているのは、論理学－自然哲学－精神哲学と続く学の体系(後のエンチュクロペディー体系)の中での精神哲学の一部門に精神現象学がなったことで、精神現象学は応用学の一部門として純粹学である論理学に先導される、論理学を前提するとして、その精神現象学を論理学は前提する。つまり相互前提すると解釈しているのではないだろうか？これにただちに反論すると、先ず1812年当時は自然哲学も精神哲学もエンチュクロペディーも書かれてはいなかったことが指摘され、さらに1817年の『エンチュクロペディー』初版の精神哲学には精神現象学という節の名前はなく、精神哲学第一部主観的精神の区分はA. 魂－B. 意識－C. 精神であった。(e. 初版 S. 14-15) とはいえ「学の導入として」の大『精神現象学』と『エンチュクロペディー』二版以降の精神哲学第一部主観的精神の「B. 精神現象学 意識」の関係は問題である。上ですでに指摘したように前者が縮小したのか、それとも大精神現象学と小精神現象学は別物か問題である。(私見は別物で、ヘーゲルは死の1831年まで「学への導入としての」精神現象学を捨てなかったという解釈である。)とはいえ、ヘーゲルは後の『エンチュクロペディー』の初版、第三版執筆時に解釈者を困らせ、幸津博士の解釈に味方するような発言をしていることは事実である。大『精神現象学』の前提性の否定あるいは制限と受けとられかねない発言である。

例えば、1817年の『エンチュクロペディー』初版での次の言明はどう扱えばよいのだろうか。「私は以前、意識の学的歴史である、精神現象学を、それが純粹学の概念の産出 (die Erzeugung) であるが故に純粹学に先行するという意味で、哲学の第一部という意味で取り扱った。しかし同時に (zugleich), 意識と意識の歴史は、他の哲学的諸学同様、絶対的始元ではないし、むしろ哲学の圏域の一部分 (ein Glied in dem Kreise der Philosophie) である。」(e. 初版§36 Anm.) ここから、ある解釈者は、ヘーゲルの『精神現象学』は「学の体系第一部」(つまり「学への導入」)としての位置をここで失ったのであり、「哲学の圏域の一部分」とは『エンチュクロペディー』の「精神哲学」の「精神現象学」のことであり、『精神現象学』は「エンチュクロペディー」というヘーゲルの学(＝哲学体系)の一部になったと解釈した。しかし、注意をこらしてヘーゲルはこ

こで「同時に（zugleich）」と言っていることを見過ごしてはならない。「哲学の圏域の一部」であるにしても、「同時に」「純粹学に先行する」、学への導入であるという身分はここでも失ってはいないとは是非とも解釈したいものである。ここでは大『精神現象学』は「学の導入」と「哲学の圏域の一部」という二重の意味を獲得する。二重性を持つと性格付けておくことができよう。

しかし、「哲学の圏域の一部」とはどのようなことか。『エンチクロペディー』初版の「精神哲学」の中の「精神現象学」に相当する箇所は、「意識」という題がついていて「精神現象学」という題はこの時期にはない。しかし、実質的には、「意識と意識の歴史」という限定付きの『精神現象学』は『エンチクロペディー』の一部として含まれていると言ってよい。元来『エンチクロペディー』とは『哲学的諸学のエンチクロペディー要綱』である。「他の哲学的諸学同様、絶対的始元ではない」というわけだから、「意識と意識の歴史」としての『精神現象学』は一つの「哲学的学」としては『エンチクロペディー』の「哲学の圏域」に属している。また、「精神哲学」の末尾、ということは、『エンチクロペディー』の末尾だが、にある、例の三つの推論、つまり論理学→自然哲学→精神哲学でも、自然哲学→精神哲学→論理学でも、精神哲学→論理学→自然哲学でもよいという議論は、この初版にも、はっきりと三つの推論と呼称されているわけではないが、すでにある。いずれにしても重要なことは、ヘーゲルはここでははっきりと、『精神現象学』を第一に、「純粹学の概念の産出」つまり純粹学に先行する予備学として把えるのと同時に、第二に、『エンチクロペディー』の取り扱う「哲学的（諸）学」の一つとしても把え、第三に、第二の点に力点をおいていることである。このことはしかしよく検討してみれば、1807年からこの両義性はあったのである。『エンチクロペディー』（最初からの構想では、『学の体系』）は、特にその一部である「精神哲学」は、「意識」の議論なしにすまずことは出来ない。「意識と意識の歴史」は「精神哲学」の一部なのである。たしかに1917年には、「同時に」という語句に注目することで、「精神現象学」の「純粹学の概念の産出」という役割は、かろうじて保たれていると言わざるを得ない。

しかし、上の文に続いて、より決定的なことがヘーゲル自身によって表明されている。つまり、「学の立場に立つ為には」、「純粹に思考するという決意（der Entschluß, rein denken zu wollen）」で充分であり、「懷疑論」は「余計な方途（ein überflüssiger Weg）」であるという箇所がある。（ibid. §475, 476, 477）この「懷疑論」がイコール大『精神現象学』であれば大『精神現象学』は「余計」となるからである。（この箇所は、『エンチクロペディー』第二、三版にも、ほぼ同じ形で存在する。）

「認識の全形式を貫き通す、否定的学としての、懷疑主義は、同様にそのような一つの序文（導入 eine Einleitung）であるだろう。しかし、その懷疑主義は、喜ばしくない方途であるばかりでなく、むしろ同時になにか余計なものであるだろう。というのは、ディアレクティーク的なものは肯定的学の本質的契機であるからである。さらにその懷疑主義は有限な形式をまた、単に経験的に、非学的に見つけ、与えられたものとして受けとらざるをえないだろう。そのような徹底された懷疑主義の要求は、学には、全てへの懷疑が、いや、むしろ全てへの絶望が、つまり、全てへの完全な無前提が先行すべしという要求と同じである。（それ故、）この要求は、純粹に思考せんという決意において、全てのものを捨象し、その純粹な抽象、思考の単純さを把握する、自由によって、元来実際には遂行されているのである。」（ibid. S. 68）これがヘーゲルのこの問題箇所の全文である。

先ず文の読み方であるが、第一文の「同様に（gleichfalls）」は、何と同様になのか。「語識の全

形式を置き通す、否定的学」であるのと同様に「序文」でもあるとも読める。しかし、第二、三版では、この *gleichfalls* をヘーゲルは削除している。(Enz §78 Anm.) そして前節に引用した『精神現象学』への言及も削除してある。(その引用は「私は以前、——精神現象学を」で始まり、「哲学の圏域の一部である」で終わる箇所である。) 一つの推測としては、『精神現象学』への言及の削除により、*gleichfalls* の削除が帰結したと言えなくもないだろう。そうすれば、「懷疑主義は——(『精神現象学』と) 同様に、そのような序文(学への導入)であるだろう」と読めよう。懷疑主義と『精神現象学』は並列され別物とされることになる。そして、実は、現在問題にしている引用箇所の後に、カント哲学による、「実際の認識に先立って認識能力を批判的に探究する」という要求への言及がある。これに関連づければ、この三十八節の *Anmerkung* は、先づ『精神現象学』に言及し、次に懷疑主義に言及し、そして最後にカント哲学に言及するという仕方で、学の導入(序文)についての議論をしているのではないのか。このような推測が成り立つ。第二に、「そのような一つの序文 (*eine solche Einleitung*)」だが、そのようなということは何を指しているのか。前後に *Einleitung* という言葉がないことから、これは、『精神現象学』を指すと考えてもよいだろう。そうすれば、「そのような(『精神現象学』のような)一つの序文」と読める。するとやはり懷疑主義と『精神現象学』は並列される。つまり、ここで問題となっているのは『精神現象学』ではないということになる。AとBと言う並列ではBはAではないのだ。たとえよく似ていてもである。この箇所は、第二、三版でヘーゲルによる書き足しがある。「そのような一つの序文」が「そのような前提の無意味さを示す、一つの序文 (*eine Einleitung* ——, *worin die Nichtigkeit solcher Voraussetzungen dargetan würde*)」(Enz §78 Anm.) となる。もちろんこれも、先に言及した『精神現象学』は「哲学の圏域の一部」でもあるの削除に対応して、*worin* 以下が書き足されたと考えれば「そのような一つの序文」の「そのような」が、『精神現象学』を指すことの傍証となる。初版に戻ろう。要するに、この「懷疑主義」=『精神現象学』かどうかが問題である。さて、この「懷疑主義」は「有限な(認識の)形式を単に経験的に (*empirisch*)、非学的に (*unwissenschaftlich*)、見つけ (*finden*)、与えられたものとして受けとらざるをえない」とここでヘーゲルによって記述されている。もしこの懷疑主義=『精神現象学』なら、『精神現象学』は「非学的」とならざるをえない。ところが、『精神現象学』は一つの「学」であり、学の必然性において叙述された書であり、ヘーゲル的学の理念によって貫かれた書である。それに「経験的」、「受けとる」態度も『精神現象学』に全面的に合致してはいない。それ故、ここで言及されている懷疑主義とは『精神現象学』のことではない。こう言えるのではないか。そのように提案したい。しかしそれでも、「そのような徹底された懷疑主義 (*ein solcher vollbrachte Skeptizismus*)」は『精神現象学』の「序文 (*Einleitung*)」の「自己を徹底する懷疑主義 (*dieser sich vollbringende Skeptizismus*)」(PhG S. 72) を連想させるし、更に、ここの「全てへの懷疑」「全てへの絶望」は、『精神現象学』の同じ箇所の「懷疑の道」(*ibid.*)、「絶望の道」(*ibid.*) を想起させる。この連想は必然的である。しかし、ヘーゲル自身によって、『精神現象学』への指示がはっきり示されてはいない。このように大『精神現象学』が否定されているとは言えないと解釈したいものである。

ところで、後のベルリン時代の『エンチュクロペディー』にある懷疑主義への言及、つまり、「ディアレクティーク的なものは、悟性によって単独に切り離されて受け取られ、特に、学的概念のかたちで示されると、懷疑主義となる」(Enz §81 Anm.) は、このハイデルベルク時代の『エンチュクロペディー』にもある。(e. 初版 §15 Anm.) ディアレクティークの三契機、

①悟性的、

②否定理性的（＝ディアレクティーク的）、

③肯定理性的（＝思弁的）

の区分けは、今問題にしている第36節の前の第15節にある。そうすると、ここで問題にしている懷疑主義は、第15節のそれを指しているとも考えられる。ここでも「ディアレクティーク的なものは肯定的学の本質的契機である」と言われている。してみれば、この際の懷疑主義とは「ディアレクティーク的契機」と同じものを指している。そうすると「学としての懷疑主義」がここでは問題となってそれが「何か余計なもの」とされているのであって、ディアレクティーク的契機としての懷疑主義は否定されてはいない。そうでなければ次の文は成立しないだろう。「その懷疑主義は、なにか余計なものであるだろう。というのは、すでに述べた様に（第15節）ディアレクティーク的なものそれ自身が、肯定的学の本質的契機であるから（er [= der Skepticismus] würde — darum etwas überflüssiges sein, weil das dialektische selbst ein wesentliches Moment der positiven Wissenschaft, wie oben gesagt ist)」。 (e. 初版§36 Anm.) この、「というのは darum---weil」という理由付けが以上のことを示している。学の中にディアレクティーク的なもの（＝懷疑主義）が含まれるから、懷疑主義は別の学としては余計なものなのである。これが余計であることの第一の理由である。第二の理由が、先に言及した「経験的」、「非学的」、「与えられたものとして受け取る」、「見つける」である。これは簡単に言えば、ものごとを前提する偶然的（必然性に欠ける）考察が懷疑主義だから余計なものだというわけである。（これは第一の理由の学の契機と矛盾している。非学的と学の契機は合致するのだろうか。）第三の理由は、「先行する」に関するもので、要するに、懷疑主義の要求は、学に全てへの懷疑、絶望、無前提性が先行すべしという要求と同じ、ということは、後者の要求で充分で前者は余計なものであるということである。しかもこのことは、純粹に思考せんという決意ですでになされているというわけである。つまり、懷疑主義のいわんとすることなど、すでに学内部でやっているということである。この三つの理由付けは、どうみても懷疑主義は余計なものとしんとするいささか強力なヘーゲルの意志である。しかし、この純粹に思考する決意と学との関係はどういうものなのか。同じ、36節の主文部でヘーゲルは次の様に言う。学は、学が純粹な思考であれということ以外は前提としない。（die Wissenschaft — nichts voraussetze, als daß sie [= Wissenschaft] reines Denken sein wolle）」 (ibid.) つまり、学は、「純粹な思考たれということ（＝その決意）」は前提とするということである。つまり少なくとも大『精神現象学』の作者であるヘーゲルはその大『精神現象学』によって意識の二項対立から這い出て、純粹思考たれという決意にまで進むことが一応はできたのであろう。そして、学がこの「純粹思考」（＝「純粹知」、「絶対知」）の境地で遂行されることの「正当化」は、まさにあの大『精神現象学』なのであった。純粹な思考たれという決意以外は前提にしない＝それだけを前提にする訳であるから、やはり精神現象学の前提性は温存されていると解釈したいものである。そもそも、いま問題となっている箇所は、36節の「補遺（Anmerkung）」のところである。第35節や第36節の主文部が問題としているのは「学の立場に立つ」為の要件である。第35節、第36節をみてみよう。「学の立場に立つ為には」次の前提を破棄しなければならないとそこに書いてある。

1. 悟性規定の固定的妥当の前提,
2. 与えられた、表象された、すでに出来上った基体の前提,
3. 出来上がった固定的述語を与えられた基体に関係付けることとしての認識の前提,
4. 認識主観とその客体が各々それだけで固定的で真であるという双方の対立の前提,

これらの前提の廃棄である。(以上35節) 四つの前提の廃棄が学の立場に立つ為に必要である。この前提の廃棄は「まだこの段階では、(第一に) この前提が虚偽である故に必要とされるのではなく、また(第二に) 学がこの前提の虚偽性を始めて示さなければならない故にでもない。そうではなくて、この前提が表象に、直接的思考に、つまり与えられたものにとらわれた思考に、思いこみに、属しているから、つまりそもそもこの前提が与えられたもの、前提であるからだ。学はしかし学が純粹思考であれということ以外は前提にしない。」(第36節) つまり、前提の廃棄とは思いこみ(ドクサ)としての思考の破棄にある。しかしドクサである思いこみとエピステーメーである知識の峻別こそはプラトン以来哲学が果てしもなく問題にしてきたところである。思いこみの破棄はそうシンプルにできることではない。廃棄したと思ってもつきまどわされるからである。契機になるとはこのことだ。学は一つのことを前提にする。「純粹に思考せよということ」だけを前提にするとする。「純粹に思考すること」が的確に出来れば『精神現象学』、つまり、哲学への予備学などは必要ではない。しかし、純粹に思考することはどのようにしてえられるのか。それは一挙にえられるのだろうか。四つの前提を廃棄して一挙に、学の立場に立ちうるのだろうか。『精神現象学』以外の「方途(ein Weg)」が可能ということなのだろうか。しかし、その場合も36節で言われていたように『精神現象学』は、純粹学に先行する「学の概念の産出」として、この時代(1817年)にも全面的に否定されたわけではないことに注意すべきだろう。さらに、「学は学が純粹思考であれということ以外は前提しない」と言われるわけで、つまり「純粹思考たれ」ということは前提にするのであり、そして「学が純粹思考であれ」ということが『精神現象学』の果たすべきことである限り、『精神現象学』は否定されてはいないと言える。

ところでこの決意(der Entschluß)は、『精神現象学』の「自己を徹底する懐疑主義」の箇所の決意(der Vorsatz)と同じではない。つまり、決意をするのには、それなりの背景(一つのBildung, 構築)が必要である。学の前提する決意も、一つの構築を前提とする。この36節について言えることは、全面的に、「学への導入」(予備学)としての『精神現象学』をヘーゲルは否定してはいないということである。予備学は本来の学の展開場面で契機=境地(エレメント)となるにしてもである。

さてさらに『エンチクロペディー』第二版・三版では『エンチクロペディー』初版にあった「哲学の圏域の一部」の箇所は書きかえられてしまう。つまり消え去ってしまう。しかし、もっとより問題적である発言がヘーゲルによってなされる。「私(=ヘーゲル)の精神現象学において、その書は出版の際、学の体系の第一部と呼んだのだが、そこでは、精神の第一の、最も単純な現象、直接的意識から始めて、意識の弁証法を哲学的学の立場まで展開するという叙述の道行きがなされ、この(学の立場の)必然性はこの道行きによって示される。しかしその為に意識の単に形式的なものに留まることは出来なかった。というのは哲学知の立場は同時にそれ自身、最も内容豊かで最も具体的立場だからである。それ故、結果として現われる時は、哲学知の立場は、意識の具体的形態をもまた、例えば、道德、人倫、芸術、宗教をも前提としていた。(『エンチクロペディー』の)哲学的(諸)学の固有な部分の対象という内容の展開が、それ故、同時に、かのさしあたっては形式的なものに制限されるかにみえる、意識の展開に属する。この内容が自体(対象)として意識に関わっている限り、意識の背後でかの内容の展開が行なわれるのにちがいない。叙述はこのことによってややこしくなり、具体的な部分(『エンチクロペディー』)に属することが一部、すでに(『精神現象学』という学への)導入(Einleitung)に共に属している。」(Enz S. 49) これを「学の導入として」の精神現象学に対してどう意味付けるべきか? 単純に1807

年の大精神現象学では意識の形式的なものに留まらず徹底性を追求して意識の具体的なものまで、一定の制限のもとでだが、問題にせざるを得なかったということ、つまり現在の精神哲学の一部門である精神現象学と議論の素材が重複したということではないのか。それに、「具体的部分」という表現で双方は、はっきりとここでもヘーゲルによって峻別されている。というのは1830年の『エンチクロペディー』第三版でも大精神現象学の「学の導入」の機能は否定されていないからである。『エンチクロペディー』初版と比較してみると、『精神現象学』が「哲学的学の立場」または「哲学知の立場」の「必然性」を示す、学への「導入（序文）Einleitung」であるという点は、初版で「純粹学の概念の産出」とされたのと同様である。ただ「哲学の圏域の一部分」という初版の叙述がより詳細となっている。といっても注意しなければならないことは、初版では、『精神現象学』が「哲学の圏域の一部分」、つまり、『エンチクロペディー』に含まれるかのようであったのが、第三版では、『精神現象学』に『エンチクロペディー』の一部が「属している」、つまり混入しているとなっていることである。初版と第三版の差異はこの点については大きい。初版のこの箇所を全面的に書きかえていることからしても、見解を変えたと推測される。または初版の不明瞭な表現を変えたのかもしれない。いずれにせよ、ヘーゲルは『精神現象学』をもはや『エンチクロペディー』の一部とはしない。『精神現象学』と「精神哲学」は異なるのである。「精神哲学」の内容（道德、人倫等々）が対象として、意識に対立、対向するもの（Gegen-stand）として、意識に関わってくる限り、その内容は『精神現象学』にも含まれてくる。しかも「精神哲学」の混入は「一部（zum Teil）」なのである。さらに、ここで「純粹知」、「絶対知」が「哲学知」、「哲学的学」と呼ばれていることも注目すべきことだろう。初版6節にあった「純粹に思考するという決意」の箇所は、少々字句の書きかえ（前述の通り、gleichfallsの削除、eine solche Einleitungがeine Einleitung—, worin die Nichtigkeit solcher Voraussetzungen dargetan würdeに書き足され、etwas überflüssigesがein überflüssiger Wegと書きかえられた等々）と前後の、『精神現象学』とカントの認識能力批判への言及が削除され、さらに『エンチクロペディー』の「(小)論理学」への「予備概念（Vorbegriff）」が、初版に比べて、拡大され、4倍以上になった。そして重要なことは、「学が純粹思考だけは前提する」という箇所が削除されていることである。しかし、「学には純粹思考であれ」ということが前提されるという点であるが、「学には全てへの懷疑、つまり全てへの全面的無前提が先行する」とあるから問題はない。『精神現象学』への言及は、もっと前（25節）に移され、カントへの言及はより詳細に（40～60節）究明されている為、削除された。それ故、より一層、『精神現象学』との関連はこのことに伴って薄れた。そして、この箇所は、「客観性への思想の第三の態度」＝「直接知」の一部となる。「懷疑主義」は直接知の枠内で論じられている。しかし、この「予備概念」はある意味で『精神現象学』にとって代わるものではないのか。予備概念で問題とされる三つの態度の解明は、ヘーゲルの「論理学に付与されている立場と意義を解明し招来する為の詳細な序文（導入 Einleitung）」なのである。（Enz§25）もっともこの解明は「歴史的、論証的にのみ（nur historisch und rasonierend）考察態度をとる」（Enz§25 Anm.）という「不便さ」（ibid.）を持っているとことわっている。「歴史的、論証的にのみ」ということは、ヘーゲルの意味では「非学的」ということである。序文としての、この予備概念はきわめて限定されたものといえる。ところで、このベルリン時代の『エンチクロペディー』でも、「自己を徹底する懷疑主義」という『精神現象学』の規定と、「徹底した懷疑主義」（78節）の関連を全面的に否定する論拠はない。しかし、全面的に肯定する論拠もまたないと言える。

ともかくも、ベルリン時代の『エンチクロペディー』では、『精神現象学』は意識から哲学知

の立場への展開を必然性において叙述したものとして認知されており、さらに、精神哲学の一部が混入した、つまり『精神現象学』と「精神哲学」は完全には重ならないことが示されている。双方は精神の領域を素材とする限りでは、実際宗教道德などの素材を共通して取り扱わざるを得ない。しかし各々の身分は「学への導入」(＝非具体的な部分)と「具体的な部分」(＝「学の一部門」)として保持されている。

さて最後に、幸津博士の独特の意識把握、つまり第三の捉え方、「学の体系全体に対して意識が持つ方法的意味という意識の第三の捉え方」を吟味してみたい。方法としての垂直な意識という概念を幸津博士が取り出すのは、論文でははっきりしないが、著作『意識と学』ではある程度の見当がつく。かつてニュルンベルク時代の手稿の分析で欲望という実践的概念を提示して見せた博士にふさわしく、決意という実践的概念がこの第三の捉え方の根拠になる。すでに上での1817年の『エンチュクロペディー』の分析で学は純粹に思考せよということ以外は前提しないというヘーゲルの発言を私は吟味したが、幸津博士はこの決意は大精神現象学とは無関係とした上で、学全体に対して決意は「方法的意味を獲得」(幸津前掲書194頁)していると言う。これは確かにいままでに解釈史で見たこともない指摘である。さらにこの決意は意識が行うことでありと論が続き、この決意の実践的意味が描写され、このような「純粹に思考しようとする決意」という「意識の主體的決断の契機」がここにあり、ヘーゲルの後期体系をいわば垂直方向から規定しているというわけであろう。まったく驚くべき解釈である。しかし、決意は学つまり論理学へ入る時に行われるのであり、恒常的に叙述に付随しているとはヘーゲルは言っていない。また大『精神現象学』序論で明らかにされた思弁的命題で示されているように外から意味付けをする「第三の主観」をヘーゲルは排除している。ハイデルベルクの『エンチュクロペディー』初版での四つの前提の第三番目の前提の廃棄もこれを示している。いやそれは認識主観の設定の破棄であり実践的主観の破棄ではないと指摘されるかもしれない。一般に外からの意味付ける主観の設定はヘーゲルは破棄している。ヘーゲルでは主体主義というのは一般に否定されている。さらにすでに指摘したように、純粹に思考せよという決意と精神現象学は別物ではないのだ。またこの決意は意識の立場に立つ意識ではない。意識は外との対向関係において二元性にまどわされているものである。論理学の展開はその展開をする意識との対話的關係によって成立していると幸津博士は指摘する。しかしこの根拠はない。「学の立場は、この自己と異なる意識の立場の現前によって、いわばその都度喚起され、これとの対決の結果初めて生ずるのである。」(前掲論文98頁)このように幸津博士は主張されるが、意識と「意識の立場」を幸津博士はヘーゲルが峻別していることに気付いていない。物自体と意識という二項性にこだわるカント哲学的立場をとりわけヘーゲルは克服すべき課題としていて、このようなカント的な精神の「現象学」を廃してアリストテレス的「靈魂論」の近世的復活をヘーゲルは考えていたのである。ヘーゲルの使用するズブイェクト主基体Subjekt概念も近世的主観・主体概念を遙かに越え出ていたのである。哲学史の通念ではヘーゲルは近世的主体主義の権化であるとされているが実はその反対の面があった。(筆者つまり私はかつてそのことについて論じたことがある。拙稿、「ヘーゲルの客観的思考と自己意識」、『哲学』(日本哲学会編)34号、1984年150-161頁)すべてのものは主観によって意味付けられるという主観主義にあらがってヘーゲルはあらゆる場面で主観主義の底が破れていることを指摘していた。例えばあるベルリン時代の講義で次のように言っていた。「鳥のいろとりどりの羽毛はみられていなくとも光彩をはなつ。その鳥の鳴き声は、聞かれていなくともなり響く。一夜咲くだけのひもサボテンは南の国の密林の中で、だれかに感嘆されることなくしおれてしまう。また、この森林、

美しくうっそうと繁った草木のからみあいそれ自体も、よいかおりを発しながら、これまた同様に、だれに享受されるでなしに朽ちはててゆくのだ。」（SW 8-102）アンゲルス・ジレジウスと同様の事態がここにはあると言わなければならない。

注

テキスト引用箇所の傍点など強調はヘーゲル自身のものではない。引用したテキストはズールカンブ版全集 G.W.F. Hegel, Werke, Suhrkamp Verlag, 1970 を使った。引用で SW 3-58 とあるのはズールカンブ版全集の 3 巻 58 頁の意味である。有名な著作の場合は、次のように引用した。全集 3 巻 Phänomenologie des Geistes は PhG と、8 巻 9 巻 10 巻 Enzyklopädie は Enz と、5 巻（『(大) 論理学』二版の第一冊）と 6 巻（『(大) 論理学』初版の第二冊）Wissenschaft der Logik は、各々 WLI, WLII と、略記した。さらに、『(大) 論理学』Wissenschaft der Logik 初版は l. 初版と略記する。テキストは、実際の初版本の写真復刻版である。G.W.F. Hegel, Wissenschaft der Logik, Faksimiledruck nach der Erstausgabe von 1812, 1966 である。『エンチュクロペディー』初版、ハイデルベルクの『エンチュクロペディー』と呼ばれる、Enzyklopädie（初版）は、e. 初版と略記する。テキストは、グロクナー版全集 6 巻 G.W.F. Hegel, Sämtliche Werke, Bd. 6, 1956 である。PhG についてはアカデミー版全集 G.W.F. Hegel, Phänomenologie des Geistes, Gesammelte Werke, Bd. 9, 1980 も参照した。アカデミー版は GW と略記した。なお幸図博士の『意識と学』もいつもに変わらず博士より私に送ってくださった。記して感謝したい。